

精神科医の思うこと④

ー私の旅のスタイルと“ポーランド”ー

松村 奈奈子

この冬、夫婦で3回目のポーランドを巡ってきたので、今回のテーマは海外旅行とポーランド。

★これまでの私の海外の旅のスタイル

好奇心旺盛なので、独身時代はよく旅に出かけました。

大学卒業旅行でドイツをユーレイルパスで友達とバックパックで巡ったのが、初めてのヨーロッパでした。“なんて熟した文化なのだろう”と魅かれました。

その後しばらくは研修医生活で“旅”どころではなかったのですが、研修医生活を終えても仕事に夢中になっていた頃、“先生、ちゃんと遊ばんとあかんで”と看護師さんが強引に韓国旅行に連れだしてくれました。就職後、数年間仕事ばかりしていた私は、余裕がなく何か欠けていたんだと思います。あかすり、焼肉など定番の女子旅でしたが、ゆっくり自分の時間を過ごせた時、“ちゃんと遊ばんとあかん”と気づかされました。この時、そんな凝り固まっていた私に気づき、連れ出してくれた看護師さんには、今でも感謝しています。

これをきっかけに、時間を見つけてはまた海外旅行に出かけるようになりました。

ある時、オランダを訪ねたら、なんだか肌にあって虜になってしまっていて、その後結婚するまでよく訪ねました。オランダは実に旅行しやすい国で、誰もが英語を話し、鉄道網もしっかりしており移動も楽です。テクセル島という北海に面したオランダの島を訪ねたり、小さな町の温泉にいたり、ファームステイといって農家に泊ったり…名所を訪ねるというよりは、生活スタイルを覗いたり、体験型の旅を楽しんでいました。

オランダの地元のスパ施設ではサウナは男女一緒に裸スタイル。ドキドキして友達とトライしましたが、異性の裸に対する概念の違いを受け止めると、何だか抵抗はなくなり面白かったです。最後はどうどうと裸でかっぱしていました。

一人旅の時は、ネットで申し込むファー

ムステイを数回利用しました。“アジアからくるお客は初めてだわ”と、どこでもかわいがってくれました。家族の一員みたいに一緒に食事をしたり、ドライブに連れてもらったり、夜は暖炉の周りに座って、家族の写真を見ながら、空軍に勤務する息子の自慢話を聞かせてもらったりと、楽しい時間でした。農家も世襲制ではなく日本との違いを感じる一方で、ちょっぴり保守的で親切な田舎の雰囲気は日本と同じだなんて感じたりしました。

また、私は仕事柄、医療と教育に興味津々。もちろん、医療と教育はその国の大切な基盤だと考えています。旅先でもチャンスがあれば病院や学校を覗くことにしています。しかし、病院も学校も“ただの旅人”には欧州ではなかなかハードルは高く、お話を聞いたり、外から覗くのがせいっぱいという感じでした。

ただ、十数年前にバリ島に行った時は別でした。たまたま地図で精神科病院を見つけたので、ホテルでガイドとタクシーをチャーターした時はおもしろい体験ができました。ダメもとでガイドの女性に学校と病院を見たいと告げると“OK”と軽い返事。まずは総合病院、ガードマンに小銭を渡し病棟の中まで見学できました。精神科の外来はやはり建物の端の方で、ぼつりと座って待っていた男性の姿が印象的でした。次に本命のバリ島唯一の精神科病院に。タクシー運転手が“行きたくない”ごねている様子で、ガイドが説得してくれている様子がおもしろかったです。病院に着くと、これまた門番にガイドが小銭を渡すと中まで全

て見せてくれました。見学中に開放病棟の患者さんが、わなわなと出てきて話しかけてきます。日本とかわらないなぁと嬉しくなっていました。

次はガイドの女性の子どもの通う小学校に連れていってくれて、これまた授業中なのにぐいぐい教室の後ろに。学校では日本語を勉強しているらしく、わなわなと子どもがよってきて、みんなで“いち、に一、さん”と日本語勉強の成果を披露。子ども達と即席日本語授業みたいになって、なんだかとても楽しい体験でした。

さらに“島民の普通の生活が見たい”というところまた“OK”と軽い返事。連れて行ってくれたのは自宅を公開する事で収入を得ているという家。またまた、ガイドが小銭を渡して家の門をくぐります。欧米系のリクエストでこういう家の存在があるのでしょうか、見学者は欧米系の旅行者ばかりでした。庭の中心に祭壇があって、本で見たバリ島の家の典型的な作りでした。台所で炊きあがったお米にア리가ごま塩の様にいたのが印象的でした。その後、ガイドの女性は自分の自宅にも招待してくれ、学校から帰った子供たちと一緒にお茶を楽しみました。

最後はタクシーの運転手さん、ガイドの女性と子供と一緒に屋台に出かけ、みんなで地元ごはんを食べ宴会状態に。“変な客”に不機嫌だった運転手さんも、最後は笑って許してくれました。

もちろん、屋台のナシゴレン(焼きめし)には炒めたア리가ごま塩のようについていましたが、とっても美味しかったです。

数年前まで病院勤務の合間に病院付属の看護学校で授業をしていました。上記の体

験記をちょこちょこ授業の初めにしていたところ、授業後のアンケートで旅行話は結構好評でした。

私は学生に、多様性を受け止めるおもしろい社会人になって欲しいと思って、毎年この体験記を話していました。

★そして、今なぜにポーランド？

夫はフランスを中心にラテンの国が好き、私はオランダ・ドイツを中心にゲルマンの国が好き…。

当然、結婚後二人で旅の計画を立てはじめるとまとまりません。その時、一致した旅先が“一度、アウシュビッツを訪ねてみよう”でした。

ベルリンから国際列車で初めて訪ねたポーランドは、魅力的な国でした。

アウシュビッツ訪問のため宿泊した都市クラクフは、ナチス司令部があったので戦争被害を逃れたため街並みは美しく、人々は暖かく治安も良かったです。

情報過多の西ヨーロッパと違って、東ヨーロッパは新たな発見の連続でした。西ヨーロッパではどこにでもある中華レストランがほとんどなく、寿司屋も多くはポーランド人が握っています。共産圏であった歴史が、いろんなところで影響しているのが感じられました。逆にいうと、西ヨーロッパよりもヨーロッパらしさが、色濃く残っている印象を受けました。

物価もドイツの2／3ほどで旅人には助かりました。しかし、当然賃金も低く、英語

やドイツ語のできる若者が西ヨーロッパに出稼ぎに行ってしまうというのもうなずけます。ちょうどクリスマス休暇にベルリンからの国際列車に乗ったのですが、ドイツから帰省するポーランド人で満員でした。

そんな感じで、夫婦してポーランドにハマってしまったので、去年はポーランド北部から中部の大都市（グダンスク・ポズナニ・ブロツワフ）を、今年は南東部の小さな街（ルブリン・ザモシチ・ジェシェフ・プジェミシル）を鉄道で巡りました。鉄道網^{※1)}はしっかりしており、旅はしやすいです。夫婦して感じたのは、大都市よりも小さな街を旅した今年が楽しかったです。素朴な人のやさしさや時間の流れのゆったりさが、熟年夫婦にはあっていたのかもしれない。

ポーランドでは、小さい街を訪ねても、ナチスの爪痕を必ず目にします。

ルブリンのマイダネク強制収容所。アウシュビッツ・ビルケナウに次ぐ規模の収容所です。ドイツ国内の収容所も訪ねましたが、収容所の多くはポーランド、特にウクライナなど南東部の国境付近に多く点在することも、訪ねていくうちに理解しました。

世界遺産の街ザモシチ、それはルネサンス建築の残るきれいな街です。しかし、歩いてすぐそばにあるロトンダという19世紀の要塞は、ナチスにより処刑場として使用され、美しい円形の要塞の周囲には数えきれないほどの十字架が立っていました。

今回の旅では、私は小さな街のこの風景が一番心に残りました。



ポーランドの街を訪れる度に、私はナチスが行った事をまだまだ理解できていなかったんだと痛感させられます。

そして、ナチスの爪痕を扱った映画をいくつか見てきましたが、その本当の背景を理解していなかったんだとも感じさせられ

ました。

アウシュビッツ・ビルケナウ収容所では専任の日本人ガイド※2)を申し込みました。彼のガイドは我々に問うように、考えさせられるように、淡々と語られます。見学しながら、これまで見てきた映画がいくつも思い出されました。

ワルシャワのワルシャワ蜂起博物館。唯一日本語オーディオガイドがあった博物館でした。

丁寧なガイドを聞いていると、あっという間に半日が過ぎていました。映画“戦場のピアニスト”の背景がワルシャワ蜂起である事はしていましたが、博物館を訪ねて初めて、主人公をとりまく本当の状況を理解できた気がしました。映画監督アンジェイ・ワイダの好きな夫は、その作品を思い出していたと言います。さらに、ワルシャワ蜂起（1944年）の実情を、ポーランド国内では社会主義政権崩壊の1989年以後に、

ひろく国民が知る事ができるようになったと知り驚きました。それゆえ、博物館は2004年の創立です。ソビエト（ロシア）の影響下では歴史さえも統制されていたのです。

歴史に翻弄され、国土が戦場になったというのはどんなことか？を、ポーランドでは訪れた小さな街の爪痕を見つめながら、いつも考えさせられます。

もちろん、戦後美しく再建された街並みやお城をみたり、美味しいものを食べ歩いたりも、ポーランド訪問の楽しみではあります。

私たち夫婦は、ポーランドから学ぶことがまだまだあるように思えて、またポーランドを訪ねたいねと話しています。

よかったら、いつか、みなさんもうどうぞ。

★注

- 1) 鉄道網はしっかりしています。しかし、実はユーレイルパスを販売しているのに、現場の乗務員さんがいまひとつパスの存在をしらないので、英語で書かれたパスをみてとまどう乗務員さんが多いです。ワルシャワ駅でさえ同様の対応です。ただ、みんな優しいので、希望をとにかく伝えると何とかかなります。
- 2) “地球の歩き方”にもアウシュビッツで・ビルケナウ専属ガイドとして載っている、有名な日本人ガイドさん。見学の際には“地球の歩き方”をみて、メールでぜひ事前に申し込んでください